

鴻 koh

月刊俳句誌

令和2年2月1日発行  
(毎月1日発行)  
第15巻第2号 通常164号

2月号  
2020



棉吹いて吹いて下総曇りかな

いちにちを一会の刻に冬苺

引きどきの干潟に鴨の来るは来るは

蘆刈の熾してくれし夕焚火

漱石の忌を当てもなく鎌倉へ

鬼の子にうおんうおんと瀧の音

鴛鴦の水尾が二筋日の暮るる

義士の日の水面のうつらうつらかな

文一つ書かねば木菟の鳴く夜は

蟹小屋に竹瓮が七つ年の暮

煮凝を崩し気儘といふ時間

二句一章冬の蓑虫揺れもせず

煤逃げを企んで筆擱きにけり

# 一会の刻

主宰作品

増成栗人

# 詩 作品抄

起き上がりこぼしだあれもぬない秋

三代川朋子

谷中でふ曲つてみたき路地小春

林 未生

鬼の子に吹きつさらしの宵の来る

荒井一代

波郷忌を文机に座し何もせず

倉林はるこ

手習ひのむの字むむむむ冬日和

野村昌代

秋のこゑ聴く陶窯のがらんどう

待場陶火

鯛雲リュックの中のハーモニカ

井上つぐみ

良寛のぬさうな寺の小春かな

山内宏子

朝霧やとほく雨戸を開ける音

岩崎 俊

逆縁の通夜となりたり冬の雨

本田豊明

冬立つや墨に付きたる黴の白

伊藤 隆

小春日や豊洲市場の卵焼

原 光生

芒すすきハープ奏でるやうな風

佐藤あさ子

嬰のぬくき鼓動に触るる冬はじめ

藤原明美

パン種の膨らむ間合ひ冬の鵪

美濃律子

塩蔵に吠の乾く小春かな

西條弘子

キャンパスのピザの移動車秋の昼

田邑利宏

銀杏散る遠き記憶の中を散る

山岸明子

冬隣千住あたりで雨に遇ふ

中西富士子

流星の一つは母の星ならむ

守屋吉郎

起き上がりこぼしだあれもぬない秋 三代川朋子  
 全国各地で生産される玩具。達磨型の底に重石を付け転ばしてもすぐ起きる「起き上がりこぼし」。幼き頃、これを転がして遊んだ記憶を持つ人は多かるう。作者も今は使うこともなく、部屋の片隅に置かれていたこの玩具を戯れに指でつつき、幼き日の記憶へと己がロマンを拵げてゆく。「だあれもぬない秋」は、そんな作者の記憶への懸け橋なのだ。掲句、決して正確な実景ではあるまい。作者が生み出した夢の世界への転化なのだ。三代川朋子さんの作品には、こういうロマンへの転化をししばしば見掛けることが出来る。これも個性。何処からか子供の頃の歌声が、まぼろしのように聞こえてくる作品であった。

谷中てふ曲つてみたき路地小春 林 未生

昨秋の「鴻」全国大会の折、その前日に仙台・大阪の仲間たちが、水沢和世さんの案内で子規庵を出発点に谷中周辺の吟行をしている。その折の作品であるう。谷中や根岸は江戸の下町。細い路地がいくつも並び、江戸情趣を残す建物や商店が多く並ぶ。作者も

この町並を歩き、どの路地にも寄り道をして曲つてみたき思いを抱いていたに違いない。その町のぬくもりが「路地小春」の季語の中に充分に読み取ることが出来るよう。その成果が視覚を通じた景への感情移入を引き出している。谷中にはふさわしい対象の切り取りである。

鬼の子に吹きつさらしの宵の来る 荒井 一代

林中にあつて細き糸に己が生存を托す蓑虫。少し強き風に揺れ続ける蓑虫の孤独が、作者にはいのちへの邊しさを覚えさせていたに違いない。蓑虫を「鬼の子」と言うのは『枕草子』の「蓑虫いとあはれなり、鬼の生みたりければ、親に似て、これも恐ろしき心あらむとて」とあるところから来ている。清少納言の独想的な把握なのであろうか。雄は蛾となつて飛び出すが、雌は翅を持たず生涯をこの蓑の中で終えたと聞く。そんな蓑虫ならばこそ、「吹きつさらしの宵が来る」は、その生態を作者なりに充分に捉え得ていると考えている。荒井一代さんの小動物のいのちへの礼讃が、この措辞によつて作者との一体感となつて打ち出されている。

波郷忌を文机に座し何もせず 倉林はるこ

松山に生まれ、同郷の五十崎古郷に師事し、上京して水原秋櫻子の「馬酔木」の編集に加わり、戦後は「鶴」を創刊し、人間探求派と呼ばれた石田波郷。五十六年の生涯を胸部疾患で療養生活を余儀なくされた作家だが、俳壇に大きな足跡を残している。その忌日は十一月二十一日。その日、作者は己が文机に座し、ただ無想の一刻を送つていたと言ふのだ。別に波郷のことを考えていた訳ではない。そんなぼかんとした一刻の作者像が、ふと波郷の面影と通じ合う思いを覚えている。倉林はるこさんの俳句作家としての自己把握である。はるこさんは一昨年夫君を亡くし、その前後から少し体調を崩していると聞く。俳人としての鋭き感覚を持つ作家だけに、健やかな暮らしに戻つて欲しいとの思いが私に去来している。

手習ひのむの字むむむむ冬日和 野村昌代

書道の手習いに「む」の字を書く。その型がまとまらず何度も何度も「む」の字に挑戦する。その姿を自分自身で、自らに微笑むように一句になしている。しかも、その書ききる「む」という発音が、どこか「無」に通じるように、もそもそとした滑稽感を演出している。

面白い。作者とは面識はないが、まだ「鴻」にわつて日の浅い作家。中村世都門の作家だけに、この遊びのようなリズムが、口を突いて出て来たのかもしれない。冬日和の季語も、この作者のロマンへの背景に的確に反映されている。俳句の型をきちんと覚えることも俳句の基本。しかし己が思いを己がリズムでずばりと言い切ることも文芸上の個性。また一人「鴻」の星座に新しき星が生まれようとしている。

秋のこゑ聴く陶窯のがらんどろ 待場陶火

待場陶火氏は自宅から車で一時間ほどの山里に、己が手作りの陶窯を持っている。おそらくその陶房にての作品であるう。今は知らぬが、かつてはその陶窯で小さな埴輪ばかりを作っていた。その陶房を訪れたことがある。静かな林中のひとところ、周囲の音は全て森の音であった。そこで作者は己が陶窯の中を覗き込みながら、まだからつぽの窯の中に、その森の静けさの声を聞いているのだ。ひとときの作者の自我を離れた虚無の世界のようだ。陶火氏は自我を貫く人である。しかし人にはとても優しい。句作りも然り。毅然とした主張で自らの俳句に徹しきっている。しかし対象に向ける眼差しは常に優しい。

荒川心星

## 蓮は実に

蓮は実に輪中の村の風の音  
吉良の地をゆくうつくしき雁の列  
木の実降る降る宿場への一里塚  
萩叢に山の風くる日矢が降る  
安静の日なり鋭き鴉の声  
いちにちの過客は秋の風ばかり  
ふいに凧寺領の一樹一樹にも  
一瀑に冬の日差しの戻りくる

葦枯れて根方の泥に日の当る  
鴨の数陣を組むにはまだ足らぬ  
木曾川のひかり遙かに冬桜  
靴さげて登る天守や日短か  
また誰か鐘を打ちをり枯木山  
来てみれば綿虫の降る土蔵裏  
上へ上へと綿虫に躲さるる  
しぐるるや開くに間のある自動ドア

## 葦枯れて

半谷洋子



# 羽音集

増成栗人 選



寒鴉木のでつぺんで風を呼ぶ  
 神の留守片足上げしままの狛  
 小春日や潜伏キリシタンの墓  
 山茶花や祭壇奥のマリアさま  
 手習ひのむの字むむむ冬日和  
 コキア燃ゆ常陸の苑の秋の暮  
 緒方貞子逝く美しき鯛雲  
 椋鳥鳴いて街忙しなく暮れゆけり  
 漂泊の詩人のごとき案山子ぬて  
 銀杏散る遠き記憶の中を散る  
 八十の冬ラジオ体操ていねいに  
 寒晴や割つて割箸木の匂ふ  
 冬の星厨に残る酢の匂ひ  
 潮やよし神旅立たる大鳥居  
 冬の蝶皇帝ダリアに身を寄せて  
 すすめすすめ落葉吹かる先を飛ば  
 白鷺のほつほつ歩む文化の日  
 にほどりのぷはと水面を剥がしけり  
 冬うらら沐浴好きの嬰の浮力  
 嬰のぬくき鼓動に触るる冬はじめ

習志野 野村昌代

松戸 山岸明子

松戸 吉清和代

船橋 藤原明美

谷口摩耶



## 柚子湯

自転車を行かせて冬櫂  
 手に持てばブーケのごとしブロッコリー  
 推敲を始めるたびに蜜柑剥く  
 なだらかな坂降りくれば実千両  
 石路咲くや散歩をねだる犬の声  
 抜け道は市境の道落葉踏む  
 途中まで水鳥数ふ句碑のまへ  
 柚子嫌ひの夫へ柚子湯はたてられず

# 栗庵閑話

20



おでんは やっぱり 冬のもの ですね

ぼくは 蒟蒻が 一番 好きです

蒟蒻は 芭蕉も 大好物 だった ようだよ

斬新な句を 作るには やっぱり 目新しい素材を 見つけるのが早道 でしょう

確かに そう言う 面もあるが 俳句は 何を詠むか ではなく どう詠むか だからね

「何を」は なく「いつ」 ですか

蒟蒻を 詠んだ方がいい句 なのではな どのまじに詠んだかで 良い句にも なるという ことだよ

なる ほどー

おでんの 蒟蒻を 三角に するか 四角にするか といふこと ですね

おでんが 走って 来たよ

<http://www.haisi.com/koh/index.htm>

霜指数 100!

「霜」とは晴れた寒夜、大気中の水蒸気が放射冷却により冷え、地表面や地物に触れて、その表面に付く氷のことである。「霜柱」は土中の水分が地表にしみ出て凍結し、細い柱状群となり、上方に成長するものである。

「枕草子」で清少納言は「冬はつとめて霜のいと白きも」と霜に関心を寄せている。星霜、降霜、霜月、霜天などの用法がある。

霜柱踏む青年のごとく踏む

栗人

# 霜相

● 特集

注 目から少し離してみてください。あなたにも霜が見える!?